

# 1対1で安定した生活のできる子

前島 要次

- 1 対象児のプロフィール  
 生徒名 H:N (男) 昭和50年10月29日 (中学部1年)  
 本校小学部より入学。多動症候群・自閉的傾向。  
 遠城寺式乳幼児発達検査

項目	移動	手の運動	基本的習慣	対人	発語	言語理解
発達年齢	4:8以上	4:0	4:8以上	2:6	3:9	2:6

- (1) 一般的特性
- ・集団的行動が全くとれない。
  - ・集団の中で問題行動が多発した。
  - ・自分の気に入らない事、要求が制止されるとパニックが起こり、物を投げたり、わめきまわったりする。
  - ・偏食。野菜嫌い。
  - ・身刃処理はほぼできている。
  - ・落ち着くと判断力もかなりある。
  - ・小動物に異常興味を示し、捕まえた昆虫をハサミで切ったりする。
- (2) 問題点と研究にとりあげた理由
- 小学部卒業期を迎えて、本児の問題行動が頻発し、学校を休むことも多くなってきた。中学部に入学し、環境の変化による対応困難な状態が続き、連日パニック状態が続いた。まわりの友達の本児の行動を恐れるようになり、本児に話しかけたり、近づくに寄ったりすることをしなくなり、友達関係がうまくいかなかった。特に、他人への危害を心配して、1対1で指導をすることにしたが、主治医とも相談して、集団の中での指導をさせ、担任对本児で教材室での指導を始めた。指導は、作業(和紙作り)と1対1でのかけ足運動にしほって、生活全般での安定をはかり、徐々に集団化をめざしたいと考えたのである。
- (3) 研究の仮設・取り組みの構想
- 中学部に入学した当初の本児の様子を見ると、レポートのとれた教師の指示に対しては、指示に従って行動できる場面が多々あった。また、落ち着いた状態では、本児の認知能力は高いことがわかった。そこで、最初は指示に従った行動をとらせるようとする。できるだけひかえ、担任が本児の遊び等に十分につきあってやる中でレポートをとることを目指した。本児との信頼関係が十分にでき担任と一掃な関係が不安感、緊張感を感じることがなくなった時点で、徐々に学校生活の中に適応させていくようにした。また、毎日の学校での生活の様子を報告したり、家庭訪問を十分にするなど、家庭との連携を重視しながら指導と取り組むことにした。
- 具体的には、次のような指導方針により取り組むことにした。
- ・本児に対する要求や指示を最小限にして、本児の行動を可能な限り許容することで情緒的安定をはかる。
  - ・たとえそれが本児の身勝手な理由であっても、パニックの原因を本児は必ず、持っているという考えに立って、受容的態度で接するように努める。
  - ・作業は、牛乳パックでの和紙作り、学習は1対1で指導と取り組み、本児の意識化と見通しをもった取り組みとした。
  - ・家庭との連携を強化する。
  - ・月1回、本児の行動記録をまとめ、主治医との話し合いをもって、医学的側面からの取り組みの強化をはかる。
  - ・本児の落ち着き状態をみながら、あせらず1人・2人と仲間を増やして、最終的に学級集団での活動をめざす。

## 2 指導実践例

- (1) 生活単元学習での取り組み (個別学習) .....ハガキ作りの場合.....
- 本児の作業学習では特に、牛乳パックを素材とした和紙作りに重点を置いて取り組んだ。1学期は環境への不適応な状態が続いていた為、牛乳パックをハサミで切

り開き、水洗いをして水にひたすという単純な作業を繰り返した。次の表は、1学期中の作業継続時間を示したものである。

1回の学習時間の推移（40分持続を目標）

5月	18日	19日	20日	25日	26日	27日	31日
時間	10分	10分	20分	13分	40分	13分	30分

6月	3日	4日	6日	7日	8日	10日	13日	14日
時間	30分	40分	13分	40分	25分	33分	35分	10分

15日	18日	20日	22日	23日	27日	30日	7月	1日
23分	23分	25分	40分	30分	25分	23分	時間	30分

4日	7日
40分	30分

持続時間だけを見ると、次第に長くなってきている。しかも強業当初から、本児の好きな缶コーヒを多い日は3本以上も強業化材料として使った。2学期に入ってから、缶コーヒは作業の事後に1本と決め、1日2本に限っても、作業が続く日が多くなってきている。2学期になり作業への見通しがつきだし、牛乳パックを利用して「しおり作り」・「はがき作り」と取り組んだ。次の表は、この学習に取り組む前と学習後の様子を比較したものである。

牛乳パックを素材としたハガキ作り

	取り組み当初	単元終了後
切る・皮をはぐ	<ul style="list-style-type: none"> <li>牛乳パックを切る時、残った牛乳が手につくと、作業をすぐにやめた。</li> <li>担任がそばにいないと、勝手に作業をやめた。</li> <li>水が手につくのを嫌がり、水にひたした牛乳パックにさわろうとしなかった。</li> <li>担任が予め、ビニールをはがしてやらないと、全部ビニールをはがすことはできなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>牛乳が手についても、嫌がらずに切る作業を最後までできた。</li> <li>担任がそばにいないと、決められた個数は、きちんと最後まで切れるようになった。</li> <li>冷たい水の中でも、嫌がらずに手をつけて牛乳パックをとることができた。</li> <li>自分でビニールの皮を全部、はがすことができるようになった。</li> </ul>
紙をすく	<ul style="list-style-type: none"> <li>すき枠の中に、正しく金網をセットすることができなかった。</li> <li>すき枠の中に、適量のパルプを入れることができなかった。</li> <li>すき枠から取り出した金網についている水を、タオルでうまくすくることができなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>補助なしで、一人で金網をセットすることができるようになった。</li> <li>パルプの量を自分で調節しながら、すき枠の中に入れることができるようになった。</li> <li>力をぬいてタオルで金網についている水を、うまくすくることができるようになった。</li> </ul>
仕上げ	<ul style="list-style-type: none"> <li>印刷台の上に、きちんとハガキを固定できなかった。</li> <li>印刷された箇所を手を触れてしまい、ハガキを汚してしまうことが</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>補助しなくても、線にそってハガキを印刷台の上に固定することができるようになった。</li> <li>担任がそばにタオルを置いてやれば</li> </ul>

あった。

手に付いたインクを意識して、その都度、インクの汚れをきれいにふきとることができるようになった。

「ハガキ作り」を通して単元の取り組み当初と単元終了後と比較してみると、本児が、かなり変容していることがわかる。2学期に入り、かなり落ち着きをとれ、本児の認知能力が高い状態での実践であった為、この単元に抵抗無く取り組み、この単元が大きな要因であったと思われる。また、前単元の「しおり作り」と製作工程に共通する部分が多く、作業に対して見通しを持てたことも本児の学習への参加意欲を促したと思われる。

この単元の取り組み途中、本児から「今日も、ハガキを作ろう」と話しかけてきたことがあり、本児の自主的な行動意欲を喚起することができ、有効な単元であった。

(2) パニックの状況について

次の表は1学期から2学期までの学校での、本児のパニックの状況を示したものである。1学期に頻りに起きていることがわかる。この時期の問題行動の多くは教師の実態把握の不足と環境の変化による不適応が最も大きな原因と思われる。2学期に入ると、その回数が極端に減少したが、本児が落ち着いてきたのか、担任が本児の取り扱いに慣れただけなのか、よく解らない。少なくとも、担任と1対1の関わりの中で、学級集団から離れて生活すれば、落ち着いていることは事実である

パニックの回数

	5月	6月	9月	10月	11月	12月
物を投げる	32回	19回	3回	2回	1回	1回
物をこわす	28回	7回	3回	1回	1回	0回
傷をおわす	3回	3回	0回	1回	0回	0回

(3) 合同での学習 ……………朝の会の場合……………

合同学習への本児の参加の様子を1学期・2学期と比較したものが、次の表である。

1学期・2学期の朝の会への参加の様子

1学期の朝の会の様子	2学期の朝の会の様子
<ul style="list-style-type: none"> <li>朝、登校して着替えを済ませると、教室の中になかなか入ろうとせず、学校内を歩き回った。</li> <li>クラスの友達が、本児に朝のあいさつをすると、急にパニックになり教室を飛び出した。</li> <li>みんなで朝の歌を歌う時、オルガンの音を嫌がって、情緒不安定になりがちであった。</li> <li>友達集団の中に入ると、極度に緊張してしまい、友達の前に出て日記の発表をできるような状態ではなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>着替えを済ませると、教室の中に入り担任のそばに居ることができるようになった。時々、教室から勝手に出て行くことがあるが、呼びに行くと嫌がらずに教室に入ることができた。</li> <li>また、友達から朝のあいさつをされることも、顔を下に向けがちであるが、きちんと朝のあいさつができるようになった。</li> <li>担任がそばにいて、励ましの言葉を与えてやると、クラスの友達に合わせて歌うことができるようになった。しかし、指示しないと、その場にいることはできるが、みんなと一緒に歌えない。</li> <li>朝の会の司会者から指名されると、ひとり席を立ち、みんなの前で日記を読むことができるようになった。</li> </ul>

・朝の会の司会は、当番制になっているが、1学期は全くできなかった。

・2学期は落ち着きを取りもどすにつれ担任から指示されながら、ひとりで朝の会の司会ができた。

1学期と2学期の朝の会の様子を比較してみると、少なくとも担任がそばにいてやれば集団への参加が徐々にできるようになってきたことがわかる。まだまだ集団の中での学習では、緊張をする場面が見られるが1学期と違い、急に教室を飛び出すことは少なくなってきた。

#### (4) 学校と家庭、医療機関との連携による指導

・学校と医療機関との連携による指導

中学部に新入学をする前、前担任から本児の指導にあたる上で、特に配慮しなければならぬこと、まわりの友達との関わり方について注意しなければならぬことを、十分に話し合った。また、本児の主治医の所にいき、これから指導にあたるべく、これからの方針等について話し合う機会をもった。そして、毎月、本児の学校での生活の様子を詳しく主治医に対して報告をし、医学的側面からの援助をお願いした。主治医に対しての報告の中には、具体的には次のような内容が含まれている。

・問題行動

[物を投げる・物をこわす・傷をおわす]

・担任との1対1の学習の様子 ・集団の中での学習の様子 ・遊びの様子

・出欠席の状況 ・学校生活の中で良くなった点  
現在、医療機関と密接な連携を保ちながら本児の指導を継続中であるが、今後話し合いの機会・主治医に対しての報告をしながら、密接な連携を保ち指導をしていきたいと考えている。

・学校と家庭との連携による指導

保護者は本児の学校での生活を心配し不安を感じておられた。保護者に対しては生活ノートを通して本児の学校での生活の様子を毎日、詳しく報告している。また、家庭での本児の生活を生活ノートを通して保護者に報告してもらうようにしている。

本児はよく季節の変わりめに体調を崩し学校を欠席しがちになる。本児が、欠席した時は勿論、普段の日も時間に都合のつくかぎりは家庭訪問を行い、保護者の方と話し合う機会をもつようにしている。

### 3 結果の考察と反省

入学当初、環境への不適応から頻りにパニックを起こし、本児をとりまく人達との関係がスムーズにいかなかった。まず、本児とのラポートづくりから始めて、担任と1対1ならば、なんとか学校生活ができるように行ってきた。1学期は、本児の実態把握が十分にできず、パニックの回数が多かったが、本児とのラポートがとれてくるにつれ、パニックの回数が減少してきた。また、学習の中心として、牛乳パックを利用した和紙作りを継続してきているが、本児にとってこの学習が学校での生活のリズムの中に、定着をしてきており現在では見通しを持って、抵抗無く取り組みるところまできている。学習面だけにとどまらず、少なくとも集団に参加しない状態では、学校生活の中で落ち着いた態度を取りもどしつつある。

しかし、まだまだ集団に参加した時、緊張状態に陥り不安定な状態になってしまうことがある。そばに担任が付き添い集団での学習に、本児に緊張感をあたえるようなことを要求しなければ、なんとか1単位時間は集団から離れずにいるという状況である。

### 4 今後の課題

今後も本年度の指導方針を継続しながら取り組んでいきたいと考えている。現在では担任と1対1ならば少なくとも落ち着いて生活できるところまでできている。今後の課題として、どのような方法で集団への参加をしていけば、効率の良い指導ができるか考えていかなければならないと思う。現在は、集団から離れての個別の学習との中間で定着しているが、今後は、生徒だけの集団への参加だけでなく、教師集団の中にも本児を積極的に参加させ学習させるような機会を設け、集団への参加の抵抗を和らげたいとも考えている。